

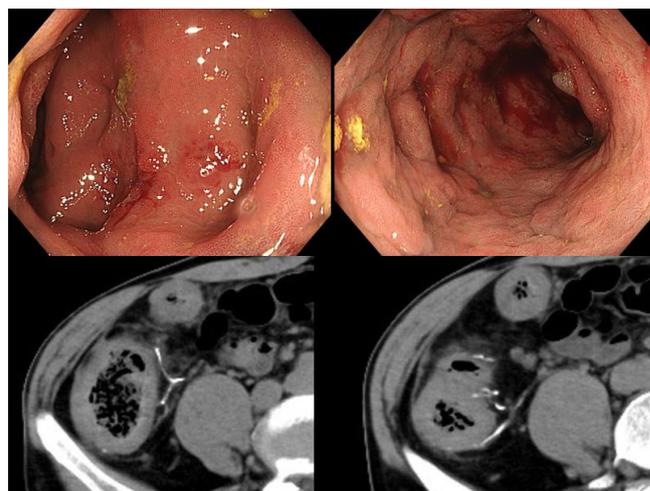
今年1月1日に起こった能登半島地震で始まり、以前病院長として“災害時などに地元の方々に役立つことは、行ってください”と職員に話をしていたためもあったのか、豊栄病院には津波を恐れて200名ほどの住民の方が避難に来られ、受け入れました。幸いにも特別な医療措置が必要な方はいらっしゃらなかったのですが、逆にこれだけ大勢の方が病院に来られると、医療処置が必要な方が来院した場合、空間的にも職員の対応的にも、医療提供が困難になる事を実感しました。行政とも話し合いを行ってはいませんが、緊急時の対応は難しいものだ改めて思い知らされました。

ここ数か月、厚生連病院の経営危機についてマスコミに取り上げられ、住民の皆様・医療関係者の方にもご不安をおかけしているかもしれません。豊栄病院においては、安定的な経営がなされてはいますが、医療界全体がなかなか厳しい状況にある事は間違いありません。国・県・市町村とともに持続可能な医療提供を模索・実行していかなければなりません。今後とも皆様方のご協力・ご支援をお願いしたいと思います。

漢方薬は副作用が少ない比較的安全な薬剤と思われがちでした。甘草による偽アルドステロン症、麻黄による交感神経刺激症状、附子による神経麻痺症状、大黄による下痢などの副作用は一般的に知られていました。1967年に医療用漢方薬製剤が初めて薬価収載され、一般の医師の処方が増大するとともに、それまで知られていなかった間質性肺炎、肝機能障害、腸間膜静脈硬化症などの副作用が漢方薬にみられることも知られてきました。

今回、豊栄病院で、漢方薬の副作用が疑われる腸間膜静脈硬化症の症例を経験しましたので、相羽医師から報告いただきます。”患者さんはアレルギー疾患のため10年間ほど他院から漢方薬の梔子拍皮湯を処方されていました。当院に「以前より右側腹部痛がある」と訴え受診、大腸内視鏡検査を行い、腸間膜静脈硬化症と診断しました。発症には

門脈圧亢進、漢方薬などの薬物内服、自己免疫性疾患との関連が推測されており、これらの要因によって静脈硬化が起こり、静脈還流が障害されることで発症に至ると考えられています。その中で特に関連が強く疑われる要因として漢方薬の長期服用が指摘されています。なかでも山梔子(サンシン)が配合されている漢方薬に多く、山梔子の主成分が腸内細菌により加水分解され、腸管壁より吸収されると色素沈着や血管内膜障害を引き起こすと考えられています。主に右側結腸を主体として発症し、徐々に肛門側へ進展することが報告され、今のところ治療法に一定の見解は得られておらず、強い腹痛や腸閉塞を繰り返す症例では手術が必要になる場合もあります。今回の症例も梔子拍皮湯が原因となった可能性があり内服は中止いただきました。漢方薬は西洋薬にない良い点も多いですが、過信しないことは大事で、特に長期投与となる場合はかかりつけ医ともよく相談することが必要です。そのような中で稀ではありますが今回のような疾患が発生することもあるので自身の症状の変化に注意しましょう。”



写真上・内視鏡画像;右側結腸に青銅色状の易出血性の浮腫状粘膜が見られ、びらんが散見されます。

写真下・CT画像;右側結腸の浮腫状肥厚が見られ、静脈の石灰化(写真で、白い線状に見えます)を認めます。

発行責任者・文責;豊栄病院広報係 宮島 透